

## されば横浜の日々よ

概観的横浜文化論



河西 稔

<横浜市総務局>

### 1——文化とはなにか

お互いに共通の原理を確認するところから始めたいと思います。岩波国語辞典を引いてみましょう。そこでは「文化」は次のように大別されています。(1)は、世の中が開けて生活水準が高まっている状態、すなわち文明開化を意味し、(2)は、人類の理想を実現して行く精神の活動、技術を通して自然を人間の生活目的に役立てて行く過程で形づくられた生活様式、およびそれに関する表現をさすものとして記されているのです。なかなか巧みな記述で、間然するところがありません。学術的な定義はともあれ、世俗的な概念としては、ほぼこれでいづくされているでしょう。(1)は広義の規定で、文明と呼ばれるものを包括しており、(2)の方はより狭く、精神的な価値形成の要素を示していると思われます。けれども現実に私たちが当面している問題といえば、世の中の進行につれて(1)の「文明」領域がとかく(2)の精神部分をはじきだし(2)の「文化」領域がとかく(1)の物質部分を敵視しがちであるということではないでしょうか。私自身は、財貨の生産と多様化によって形どられる生活環境が人間の内面を質的に変化させて、やがて高度の近代的管理社会を実現するに到る——といった風の、当世はやりの「進歩的」な発想を、そのままウノミにはできません。歴史の狡知はいつの時代でも、人間たちの思いあがりや自己過信の楽天主義を手ひどく嘲ってみせているからです。文明<シビライゼーション>の機能は、人間の心の畝間まで栽培<カルチャー>し支配することはできないのです。とはいえ私は、文化<カルチャー>の問題を個々人の英知や感受性のうちに閉じこめてよいと思っているわけではありません。「文化」が観念的名辞として用いられるときの欺瞞性は、ヘーゲル流の形而上学的文化国家観からも、ニーチェ流の悲劇的文化意志からも、ま

た戦後日本の指導理念として頻発された文化の呼称からも、すでに明らかなところでは。そこで私なりの考え方を単純に割り切ってみれば、文化とは、与えられた存在の枠組みに満足するのではなく、それを敢て壊してまで何事かをなさんとする、あるいは何ものかたらしとする人間の全体的な営みなのではないか、ということになります。それは己れの内面に築かれる自由への認識や知的創造の自覚を、他人の側へ対象化せずにはおきません。そうなれば文化への営みは、もはや個人領域の企てをこえて過去から未来にいたる社会的な関係のなかへ入りこまざるをえないことが明らかでしょう。

しかし文化という言葉は重宝な言葉です。文化住宅、文化鍋、文化体育館、国際文化管理都市、そして「健康で文化的な」生活を営む権利。たとえば文化生活とは、普通、物質的な幸福を至上とする欧米風の暮しの様式をさして使われることが多いようです。ただ生活上の利便・享楽を追求していくさいに、そこに人間関係の合理と調和の感覚が生き、ある種の精神的要素が働きかけることは間違いない。したがってこうしたプラクティカルな「文化」の用法は、現実の空手形にたいするいくらかの皮肉を伴った欲求の表現となっているようにも思います。いまから丁度55年前、石川啄木が貧しい都市居住者のひとりとして「はかなくもまたかなしくも」思い描いたわが家のイメージは、郊外の洋風住宅の、庭におかれた白塗の腰掛に坐り、<sup>エジプト</sup>埃及煙草をふかして、丸善から送られる新刊の洋書の頁をきりながら、うつらうつらと過ごすこと<詩「家」>の中にありました。

はからずも同じ年<明治44年>、夏目漱石は和歌山で「現代日本の開化」と題する講演を行なっています。これは文明論には必ず引合いに出されるほど有名ですが、彼はその中で、文明は生活の程度をいくらか引上げこそすれ、たえまない競争の

結果は生存の苦痛を少しも柔げらるものでないとし、あまつさえ日本の開化は人間活力の内発的な発現ではなく、もっぱら外発的な動機によるものであったので、なおさらに軽薄と虚偽にみちた不幸を招きよせていると述べています。くだけて申すなら、落語のまくらに用いられる「江戸っ子は五月の鯉の吹流し、口先ばかりでハラワタがなし」というヤツに外ならないでしょう。しかしながら考えてみると、啄木の憧憬も漱石の警世も、今日になおそのまま当てはまる事柄ではないでしょうか。私たちは自らの心の中に、文明によって飼いならされていない粗野な自然の部分を残しておかなくてはなりません。生命の本源の力が失なわれれば、必ず精神の危機と文明の形骸化がおとずれます。平和とは「人間に自然な相互間の争いが、戦争のなすように破壊によってでなく、創造によって表わされる状態」<ヴァレリー>をさすものならば、そのための創造的連帯と生産的闘争こそ、なによりもまず「文化」が担わねばならぬ務めであるはずで

## 2———文明開化と女郎文化

さてここで、横浜の過去の歩みをふりかえりながら、そこにどのような創造的活力が存在していたか、またそれが現在とどうつながっているかあるいは断ちきれているか>を見ていきたいと思

横浜開港の翌年<1860年>にこの地をおとずれたドイツ遣日使節オイレンプルグ伯は、その書簡集のなかで、ヨコハマの生活と活動はアメリカの金鉱地帯で大至急につくられた町に似ており、大木や焼けた切株や家や納屋などのあいだに、柵がおかれ、さまざまの顔色の人間や馬が無遠慮に往来して、極端に気味の悪い光景をつくっている

と述べています。おそらく私たちがチャップリンの映画「黄金狂時代」の中で見るような、活発で俗悪なヴァイタリティがそこにはみなぎっていたことでしょう。開港を伝え聞いて一山あてようと全国から集まった商人や山師連中がウロウロしていたことでしょうし、それにもまして外人のなかには食いつめ組みや「ヨーロッパの掃溜め」ともいうべき悪徳の輩がかなりまじっていたために、取引上の不正や詐欺は日常茶飯事であったようです。こうした街道はずれの僻地であった横浜村に新天地を求めて流れこんできた目ざとい人間たちのおりなす熱気は、見よう見まねの安っぽい新しがりが多かったとはいえ、「ざんぎり頭を叩いてみれば文明開化の音がする」といった具合に外形の模倣から入っていった日本の近代化を進める上に、大きな役割を果たしてきました。

当時の歴史を見ると、わが国最初のなになにが横浜で行なわれたという例が実に多い。鉄道の開通・電信電話の開設・ガス灯の敷設から種痘や検黴の実施にいたるまで、数えたられば限りがありません。文明開化の実を示すために立小便の取締り令が出され、違反者が当時の新聞記事をにぎわせたなどというのも、時代の風俗を語ってあまりあります。たとえば「西洋道中膝栗毛」の作者・仮名垣魯文は明治5年、本町のあたりで放尿して邏卒に見咎められ、科料100文を申付けられています<横浜毎日新聞>。そして共同便所が設置されると、浅野総一郎はその尿尿を近県に船で送り肥料に売捌いて儲けたそうですが、こうした下しもの方のものを始末して大繁昌をしたのは、何といても花柳の巷にとどめをさすでしょう。風俗資料を見ていくと、その頃の横浜は外人居留地と交易場をのぞけば、周辺の田畑の間に内外の嫖客を迎えるための遊廓が姪をきそって建ちならび、それによって新開地の華やかさを招いていたように想像できます。花街として数ヶ所、これが年を

追って移動しており、その他にも私娼をかかえた銘酒屋や後年のチャブ屋の存在、そしてフリーランサーであるラシャメン<洋妾>の横行など、まことに多彩であり、金とともにセックスへの誘惑が開化促進の大きな起動力だったことが頷けるのです。

そして「ふるアメリカに袖はぬらさじ」とよんで自害したという遊女喜遊の伝説は別格として、実際の日本女性はそんな国粹的な操をたてるよりも、ずっと食欲旺盛であったらしい。当時の廓では、「派手なメリケン不粋なジャーマン、イギリス地道で曲がない」などという戯れ唄が流布されていました。昭和28年の県警調査によると、戦後の横浜の洋娼<いわゆるパンパンガール>は約2,000、和娼は約1,500という数字があがっていますが、いまさらに民族の血をけがしているわけのものでもなく、その昔、いわゆる異人女郎にあきた外国人のために素人の町娘や人妻がきそってラシャメンとなり、最盛時にはその数2,500人<管理売春をのぞく>にのぼったという史実を見出すならば、横浜の女性たちの偏見をもたぬ魂と逞ましい生活力に、誰しも目を見張らずにはおれないでしょう。彼女等は物質的な満足と寵愛を恣のままにして、衆人の嫉視や嘲罵にもめげず誇らかに華美な生活を満喫していたそうですし、また事実、彼女等の存在によって横浜の富や街区の膨脹発展がうながされたとは、「横浜市史稿」の編者すら公けに認めているところなのです。

港市社会の形成が必然的に売淫の歴史を伴わせるといった概念規定とは別に、私には、四つ足禁避から一変して牛鍋をつくりあげた日本庶民の開かれた心と同様の開化精神が、そこには脈うっているように思えてなりません。当時の横浜に蝟集したヨソモノたちは、事業家であろうと娼婦であろうと、伝統社会から切れた新天地にあって、封建的束縛や家族関係のしがらみに煩わされぬ自由

の空気を呼吸し、自らの才覚と冒険を生かしうる個人主義の思想に急速に目覚めていったのではありますまいか。

とはいえ私たちは、それらの「人間活力の発現」の経路に、あまたの不純物が——植民地的な卑屈さや買弁的な思想がいりまじっており、開化の実が後の世につながる文化・伝統として根づくことなく、功利を追い享楽に転ずる華やかな様相のままにとどまった事態を見とどける必要があります。なるほど明治の横浜は多くの人材を生みだしました。けれども特徴的なのは、成功した初代の実業家がほとんどすべて地方から移住してきた連中であるということと、学者や芸術家は意外に横浜生まれが多いにもかかわらず、名をなすや中央に進出して地元とのかかわりがなくなってしまっているということです。そして横浜の窓口を通過した外来の技術や学問を引きよせ自らの土地に栽培していったのは、とりもなおさず、富国強兵にはびむ近代日本の新体制であり、また選ばれた個人の知識感覚であって、横浜という地域社会はせいぜいその苗床<あるいは実験室>の役割をつとめたにすぎませんでした。

結論を先に出してしまえば、横浜の文化は浮き草か仇花の文化でした。貪婪に西洋の文物を取りこみ、まね、使いこなした口蓋の強さは見事でしたが、挿木に根が生えて新たな風土に新たな実をむすぶという具合には参らなかつたのです。そしてその原因の大半が主体的なものというより、横浜のおかれた地理的歴史的な外発の条件にあったという点にも、横浜の横浜らしい特色が現われ出ているといえるでしょう。

### 3——ヨコハマ的ということ

ここで私たちは、目を横浜の政治・経済的プロセ

スの方へうつさなければなりません。幕府が横浜を開港場にきめた狙いの第一が、江戸<日本>の経済的利権の確保にあったことはいうまでもありませんが、さらに外国の直接影響を避け外人との接触を限定する上にも、横浜の地の利は近からず遠からず甚だ好適であったという事情を見逃すわけにはいかないのです。したがって、開化がすみ国力がついた暁に、治外法権の撤廃、居留地の撤去、関税自主権の確立があいついで行なわれるのですが、そうした商権回復の過程とウラハラに、紡績工業を背後地にもつ神戸港の地位が急速にクローズアップされてきたというのも、ある意味で理にかなったことでした。農民の家内副業としての養蚕労働に依拠する生糸は、坐繰製糸から機械製糸へと移行しながらも、容易に間屋資本支配形態から脱皮できず、そのため生糸に負うところの多かった横浜の商業資本は、産業資本への転化にさいして完全におくれをとり、製茶や麻真田などの小規模地場産業も近代産業として自立するに到らず、やがて京浜への巨大財閥企業の進出、基幹的重化学工業の形成の前に圧倒される運命を辿ります。かくして明治15年頃までは全国貿易額の3分の2を独占していた横浜は、その後期には東京の経済圏に完全に組込まれるに到り、神戸を中国・東南アジア市場への帝国主義型貿易の代表港とすれば横浜は対米貿易における後進従属国型の取次港として、日本資本主義の拡大再生産に車の両輪の役目をはたすことになるのです。第一次世界大戦と震災とはその趨勢に拍車をかけました。私たちはいま、生糸貿易の繁栄のうえにあぐらをかき資本の蓄積と近代的再生産を怠ってきた横浜商人の視野のせまさを指摘し批判することができます。だがそれを文化の問題として見るならば、他力によって伝統社会と引き離され対決の場を失っていたが故に、時代のナショナリズムにも、また真の意味のインターナショナリズムにも自己

を見出しえなかった、つまりはプラスもマイナスも含めて中途半端に終わってしまった、といえるのではないのでしょうか。

政治の動向も同様のプロセスを辿りました。自由民権運動の壮士だった星亨や島田三郎や伊藤痴遊、あるいは伊勢佐木町で「権利幸福きらいな人に自由湯をば飲みたい」とうたっていた川上音二郎らの官権にたいする抵抗も、政府官僚や財閥の利害の手のうちに分断・吸収されて、次第に支配階級内の政治グループの取引きや内紛の姿に変貌していくのです。明治21年、井上馨はその手記の中に書きとめています。「われわれは今こそ保守的団結を準備しなければならない。すなわち中等以上の財産家を結合して地方自治の基礎を固めさせ、中央にあっては一体の保守党となって、将来予想される政治上の狂瀾を支える支柱とする必要がある。」先見の明ある天晴れの言というべきでしょう。

さて、以上に見た横浜経済の商業資本本位の性格は、おのずと市街地を第三次産業によって形どられる町並みにしていきました。政商や紳商たちの実利至上主義とキンキラ趣味は、直接間接に遊興・消費部門をおしひろげ、先にふれた遊里三業の地は申すに及ばず、芝居小屋や寄席や活動写真館・見世物小屋・遊戯場が目貫にたちならび、新派劇などは東京上演の前にまず横浜で瀬ぶみをするほどの活況を呈したそうです。他方、貨幣流通を司どる金融業も著しく盛んで、20をこえる市中銀行が簇生し、競って横浜の儲けを中央へ吸い上げる支店経済的役割をつとめたものでした。これらはやがてパニックで将棋倒しにつぶれ、財閥銀行に統合される運命を負っています。

こうした生産的活動と結びつかない部面の賑々しさは、やがて文明開化の風俗を、先進的な意欲の失なわれた、本質的なもののカケラもない、キザっぽいモダニズム、ハイカラなスノビズム<俗物

主義>、安直なコスモポリタニズムに陥れていきました。例えばミナト・ヨコハマなどという片仮名文字の表現ひとつにしても、神戸とちがって、なにかそこに殊更に異国情緒趣味にすがろうとするわざとらしさを感じさせるのです。それは創造的・発展的な気風<エトス>の形成に失敗して、華やかさの幻影を追いかけることだけに生き甲斐を見出した社会の投影に外なりません。文芸作品などにはその影響が顕著に現われています。横浜の地にそそぐ作家の目は、まず何よりもそこに繰りひろげられた異国的情景と、その間をうごめいている女たちの姿に向けられました。谷崎潤一郎の「本牧夜話」「港の人々」「赤い屋根」、金子洋文の「淫売娘」、長谷川伸の「居留地」「異人屋の女」、大仏次郎の「霧笛」「海の女」、北林透馬の「街の国際娘」。題名を見ただけでも大よその見当はつきます。そして柳沢健らの詩集「海港」や佐藤惣之助らの詩集にしても、エキゾチシズムへの誘惑が感傷として刻みこまれたものでした。

ここで私たちは、島崎藤村の「破戒」がなぜ人々に愛されるすぐれた作品たりえたかを考えてみてもよいでしょう。

信州の風土、そこに培われた自然と社会にたいして、自らの熾烈な人間的要求をぶつけ、あるときは融和しあるときは闘争しながら解放への思想を模索していった瀬川丑松という男の像は、いまもなお私たちの心に生きうる強さをもっています。ところが、横浜を舞台とした作品からは、なぜかそうした魂のひびきが伝わってこない。つまり、内面的な持続性と積極性とを形象化していく根城のようなもの——束縛と同時にヘソの緒でもある大地の姿が見当らず、人々は作品に対してもエトランジェたらざるをえないといった趣きがあるのです。

容赦ない猛々しい爪先が、横浜の地におそいかかりました。メリケン波止場に三本マストの外国船、関内の異人商館。南京町とザキ通り。それらミナト・ヨコハマの面影を形どる一切が戦争で灰となり、目のとどく限りの焼野原の上には海の匂いだけが流れ込んできたのです。けれども、東京湾に浮かぶミズリー艦からのアメリカ軍の進駐は、開港このかた夷狄の風にそまっていたこの町に、新たな風俗を展開したものでした。エキゾチックというには、あまりに直接的な占領行政下でありましたが、それでも昭和20年の暮、一杯のコーヒーを求めてわざわざ東京から出かけてきた仙人、石川淳にとってみれば、「きれいな淡紅色の薄絹のマフラを小粋な恰好で頸に巻きつけ」た黒い兵士の胸板のあたりに、蝶が木の幹にとまるみたいにぴったりと抱きついた「赤づくめの衣裳をきた」女たちの姿は、失なわれた精神の運動をとりもどすための、きわめてショッキングなイメージであったに相違ないのです。

急造バラックと租界地と女たち、そこにはまさに開港当時を思わせる雑然とした植民地風景がくりひろげられ、一見ロマンチズムと見まちがう熱っぽい空気が流れていました。けれども内実はまるで逆の酷薄無惨な厳しさをもっていたのです。

「調達庁史」によれば、当時の政治的支配層は米軍進駐にあたって、横浜を首都の防波堤として占領軍をすべてそこで受け入れさせる方針を立てていたそうです。この事情も開港当時のイキサツとはなほだ似通っています。アメリカの極東政策と日本の開国政策との申し子であった横浜。ただひとつの、そして根本的な差異は、通商条約と無条件降伏との違いでした。これを文化の問題に引きつけて云えば、受け入れる側の主体性の問題につながってきます。かつて幕末においては言を左右し

て外人を街道筋から外れた一區画に押し込め、しかも学ぶべきものは学び、利用すべきものは利用し、どうやら一人立ちできるようになった明治中葉になると、彼等の特権をことごとく剝奪してしまうという実にチャッカリした精神を発揚したものでしたが、昭和の御代においては、はるかに卑屈な無気力さで事はこぼれていったらしい。復興の都市づくりや市民生活の便などを全く考慮の外に置いて、ただひたすら中央の意向と米軍の受け入れに万遺漏なきようにつとめたのが敗戦時の市当局者であったようです。おかげをもって港湾施設の90%、全市街地面積の27%がバタバタと接收されて、今なお約210万坪が彼等の駐留基地として残され、市の都市計画に大きな障害となっている有様です。そしてそのために市民に与えた数千億円の損害と精神的打撃とは、戦後の横浜の胎内について発展の起動力たるべきものを育てず現在に到らしめている最大の原因をなしています。今日の復興や繁栄は決して内部から起ったものではありません。これまた外発的な刺激にいざなわれて、自然成長的に見かけだけふくれ上がったにすぎないのです。

こうした中であって、戦後社会を真に逞ましく生き抜いたのは、やはり女性たちでした。大和撫子もなんのその、彼女らの変わり身の早さと実感的な生活力は、腰ぬけの為政者たちを嘲笑うかに、あざとく発揮されたものです。そういえば、武田泰淳の「風媒花」に登場するジャジャなまりのハマッ子・蜜枝の姿なども、時代と人間をうつして大変あざやかな個性を表わしていたといえましよう。横浜は、元来が女性解放の濫觴の地といえるのかもしれませんが。明治3年にメレー・キダの女子家塾が日本で初めての女子教育にふみ出してから、明治5年にへボンの婦人女子学校、ホジョスの女子英語塾、ラクロットの董女学校が設けられ、8年にはフェリス女学院と共立女学校が発足

し、19年には捜真女学校と英和女学校が設立され、さらに33年には紅蘭女学校が誕生するといった具合に、この分野に注がれた内外人の情熱は、なみ一通りのものではありませんでした。これは他方での女性の肉体市場の賑わいと、微妙な対応関係にあるようです。

明治23年には、横浜婦人懇談会が東京に遠征して、男女同権論の講演会を催しています。そのときの演題は「何故に女子は男子に蔑視せらるや」「我は恋慕せり言論の自由に」その他であったそうです。青踏社が平塚雷鳥の宣言をもって出発したのが明治44年であることを顧みるならば、先立つこと20年、まさに横浜の女性は婦人運動の先覚者の地位に立たされて然るべきでしょう。

戦後の横浜が生み出した名声が、美空ひばりと岸恵子の二大女優につきていることは、上述の事柄を背景として、まことに象徴的な意味をもっているように思えます。すなわち、ナショナルなものを代表して前者が、インターナショナルなものを代表して後者が、それぞれに位置づけられるような気がしてならないのです。

なお、いま一つの要素、京浜労働者の存在とプロレタリア文化の問題については、他の人が触れる予定ですので、ここでは省きます。

## 5——ハイヒール文化とブロック文化

妙な命名ですが、「ハイヒール文化」とはこれまでに述べた女性の生活力、「ブロック文化」とはプロレタリアの生活構造の、それぞれに今日的な姿と理解していただきたい。

ある地方議員さんの話によれば、近ごろ地元の道路舗装を依頼してくるのは女性が多い、その苦情はハイヒールで通勤するのに砂利道は困る。雨の日は途中で履き替えねばならないし——というところ

に出ているのだそうです。とにかく現代は化粧品にしろ下着にしろ、女性のおしゃれを目当てに売る商売で儲かっていないものはない。そしてこうした「文化的」要求の結果として、町は土の色や緑が失なわれた殺風景なたたずまいとなり、自動車が排気ガスをまきちらすことになる、——いったいこれでいいのだろうか、とその議員さんは訴えていました。これがハイヒールに象徴される近代主義の現実の姿です。

それからブロック文化ですが、最近、勤労者の持家要求が非常に強い、一生かかって支払うような借金をしてまで土地を買い家を建てる。そしてそのささやかな住いに寄せるささやかな夢は自分の財産を大切にしようという思想につながります。

「失うべきものは鉄鎖のみ」どころではない。ブロック塀で目いっぱい領土を囲みこんで他人をふせぎ、マイホームの確立にいそしむわけです。いってみれば、泰平状況下における労働者意識の変容、革命意欲の矮小化、大衆社会的順応と欲望の小市民化という一連の現象と結ばれるものでしょう。それはある意味で憲法の問題や近代的個人主義の感覚にマッチしたものかもしれませんが。しかし私は、これらの「小さな根城」思想<階級的団結とか働くものの協力とかいったって、結局、頼れるものは自分とその家族なんだという>を前にして、なぜか古めかしい小所有者意識を、わけでも零細分割地農民の心情の名残を感じとってしまうのです。

今日の横浜には、ロマンチズムのかけらも見あたりません。港の9割は殺伐な貨物荷役の設備ばかりですし、目下その大規模な拡充が行なわれていますが、いずれも国家的要請によるもので、市には利益どころか持出しにしかならないという現実です。日本経済の趨勢は、横浜を海の玄関から台所に変えてしまいました。これは比喩的な意

味のほかに文字どおり産業の排泄物で汚れている海や港や市街地のことを指しているつもりです。そしてこれまで満足な都市計画もなく、野放図につくられていった、チマチマと薄汚なく立てこんだ町並み。いまだに美術館や博物館がなく、大学や公園や緑地が少なく、公会堂ひとつ持たぬ区があり、本屋や映画館の数も人口の大きさに比べて甚だ見劣りするといった現状。さらにこうした立ちおくれ現象に加えて、近年の急激な人口流入とベッドタウン化現象が指摘されねばなりません。東京からはみ出した人々は、ただねぐらの便にだけ横浜に住みつ়ことになったのです。恐しい勢いで山をくずし谷を埋め粗製濫造の宅地造成が行なわれて、郊外地はその面影を一変しました。そこに入居した人々が多少とも文化・娯楽を享受するのは、勤め帰りの東京においてです。横浜はいわば居住植民地にすぎず、身のまわりのことを除けば、地域社会の問題に対する関心など、ほとんどなきに等しいといっている。横浜にロードショー劇場や芸術映画上映のアート・シアターがないのもイワレなしとしません。そうした点でまだしも地方都市の方が、独自の社会的求心性や文化的定着性をもっているように思います。

地方からの移住、人口の急増といった事態は、それだけをとってみればエネルギーの流入につながります。これまた開港当時の横浜と表面は似た現象ですが、外国人の居留と占領軍の駐留とが致命的なまでに異っていたように、そこには根本的な差異——というよりも裂け目が大きく口をあけているのです。たとえば、テレビのチャンネル争いで父親が子供にチャンネルを奪われて、オヤジの権威いまいずこと憤満やるかたなく自殺したというような、馬鹿馬鹿しいとも何ともいいようのない事件が横浜で起きていますが、これなど、いまの横浜の文化状況の甚だ示唆に富んだ縮図と見られないこともありません。

現在の雑然とした印象は、何事かをなそうとする前の混沌のうちにあるのではなくて、止むをえず放ったらかしにされている混乱から生じているように思います。

## 6———未来への可能性

「されば港の数多かれどこの横浜に優るあらめや」と歌って、栄華を誇った往時の横浜をなつかしむ人々たちはまだかなりいます。しかし私たちは“古き良き昔”への回顧趣味にかまけてはおられません。港町らしい特色といえは売春・麻薬・スラム街などといった、先人の残してくれた有難くもない財産を拒否するところから仕事を始めねばならないのです。

いま革新市政のもとで新しい横浜へのビジョンや、「だれでも住みたくなる都市づくり」のスローガンが打ち出されたことの狙いも、おそらくはその辺にあるのではないだろうか、横浜という地域社会に人間の知恵と意思を通わせ、希望の骨組みを通すこと——それをもって文化的内実をともなった文明の利便をつくりあげようとしているのではなからうかと想像できるのです。もとよりそのことだけで、すべて事足りるというわけにはいきません。言葉はいくらでもキレイゴトで飾れますが、「文化」は決してキレイゴトの形容や政治的ムードでは片づけられないものですから。

しかしともあれ、都市生活を完備する仕事と市民の自治意識を喚起し結集する課題とは、現在の横浜の行政にとって欠くことのできない二本足です。たとえば私の近所では、米軍に接収されている一帯だけがひろびろとした気持ちのよい環境であって、沿道の桜並木もそちらの側にだけ青々とした枝をさしのべ、開放されている車道側は排気ガスで醜くく葉先をちぢらしているといった光景



を目にします。すると、街路樹も緑化運動などで植えっぱなしにされたのではダメなのであって、もっと根本のところから皆の力で生活を害するものを取り除く作業が伴わねばならないのだということが分ります。このように住みにくい無秩序には、住みよい秩序をもって対さねばなりませんし、民衆をシャットアウトする権力的な部分はく米軍であれ大工場であれすみやかに解き放たれねばならないのです。そして同時に立ちおくらせている教育文化施設の充実が自然の保護をふくめて急がれねばなりませんし、大衆的・民主的な文化創造運動や教育啓蒙活動が育成強化されねばなりません。こうした過程をふんで初めて、伝統として残りうる文化的価値、すなわち真の意味の実用化により規定された造形性の美は、民衆の目によって見出されていくに違いない。いわば人間的なもの自然的なもの復権と発展がその中で可能になってくるということでしょう。

はなはだ漠然としていてそのくせ常識的な結論になってしまいました。文化とはそういう性格のものかもしれません。「これこそが横浜文化だ」とか、あるいは「横浜に文化なんてない」といい切ることがむずかしい、そしてそれ自体が地域に限定されぬすぐれてトータルな視点を求めてくるものだからです。私は横浜の歴史を顧みながら、かなりないものねだりをしてきました。しかし否定的な語法をとりながらも、過去と現在とをつなげて考えることにつとめてきたつもりです。その延長としての未来の姿を、いま図式として想定すれば次のようになります。まず港を中心として、外来文物の消費繁栄の上にたつユニバーサルな方向。つぎに工業地帯を中心として、新しい労働者文化形成への階級的な路線。さらにベッドタウンに変貌した郊外地を基点として、小市民文化確立への近代主義のライン。このそれぞれのベクトル

が民衆の生活の真実の脈絡にわけ入りながら、きびしく総合されたく撚りあわされて、一つの民主主義的でインターナショナルなコースをたどることに、私たちは望ましい可能性を見出してもよいのではないのでしょうか。いずれにもせよ文化への課題は、それが平板で陽うららな柔弱の営みでありえない以上、なにがしかの苛烈な抑揚を歴史のうちに刻みつけずにはおかないものと思います。